視　点

〈特集解題〉
労働運動家たちは現代に何を遺したか

今月号は通常の特集と趣きが少し異なる。今回のテーマは、労働組合期成会や友愛会など日本の労働組合の礎を築いた運動家の思想と運動の軌跡である。ここでは、高野房太郎、鈴木文治、松岡駒吉、賀川豊彦という４人の運動家に焦点をあてている。

そのねらいは、明治・大正・昭和期において労働運動や協同組合運動に多大な影響を及ぼした彼らがどのような思想をもち、どのように組合運動を組織していったのか、そして彼らが現代に遺したものは何だったのかを明らかにすることにある。100年以上も昔ではあるが、労働運動の原点に回帰することは、現代の労働運動を再考する絶好の機会となりうるはずである。

数多い労働運動家のなかで、なぜこの４人をとりあげたのか。その答えはそれぞれの寄稿論文のなかに示されている。

まず、高野房太郎は、日本で「労働組合」という用語を初めて実践的に使用し、いきなり労働組合を組織するのではなく、その準備団体として職工義友会や労働組合期成会を組織した。それによって、明治期における労働組合の結成は一時的に成功した。結果として、頓挫はしたものの、高野は大正期の労働運動へとつながる種をまく役割を果たした。

大正デモクラシーの時代、鈴木文治は友愛会を創立し、その運動を牽引した。歴史をたどれば、友愛会は日本の労働組合の直系の源流にあたる。その後、友愛会は総同盟へと改称され、鈴木の後を受け継ぎ、総同盟を主導した一人が松岡駒吉である。松岡は、第二次大戦後の労働運動の再建にも尽力した。

賀川豊彦は、松岡とほぼ同時代に活躍した社会運動家である。賀川は、労働運動をはじめ、農民運動、協同組合運動と幅広く大衆を組織するとともに、こうした多様な運動を横につなぐという役割を担った。

これらをみれば、いずれも「日本の労働運動の父」とよばれるにふさわしい運動家であることがわかる。

同時に、彼らの運動の軌跡をたどると、現代の労働運動の課題にもつうずる彼らの共通点を見出すこともできる。キーワードは、「労働者の人権」「連帯」「教育」「共助」である。

当時、労働者は劣悪な労働条件や労働環境のもとで働き、労働組合への一般的な理解も困難な時代である。運動家たちは、労働者の人権、すなわち労働者が人間として尊重される権利を行使するため、連帯、教育、共助のしくみをつくっていったと考えられる。

労働者自らが連帯し、労働組合を結成する。そして、労働者一人ひとりが自立した人間として成長するための労働者教育、労働者同士で助け合う共済という機能を労働組合に持たせていった。あるいは共助のしくみとしての協同組合も結成した。労働者の生活の改善や労働者の成長が社会の改善にもつながり、その先には彼らがめざす社会像があった。

その根底に共通するのは「一人は万人のために、万人は一人のために」という考え方といえるだろう。現代の若者からみれば、これは古くさいとか流行らないとか思われるかもしれない。

しかし、かつての労働運動家たちが取り組んだ課題と現代の労働運動が直面する課題とは、時代や環境は異なるものの、その本質は変わらない。現代の労働運動が重視しなければならないのは、こうした点ではないだろうか。

キーワードに示した「労働者の人権」「連帯」「教育」「共助」を意識しながら、それぞれの寄稿論文を吟味いただきたい。

（連合総研主任研究員　麻生裕子）